

「元気いっぱい・笑顔いっぱい」

特別支援教育統括コーディネーター 加賀谷 勝

「家庭でできる不登校の子どもへの支援」

県内の国公立小中学校での不登校者数が2024年度、前年度比80人（4.1%）増の2,027人だったことが文部科学省の調査で分かった。県の担当者は「保護者や教員の意識が近年変わり、無理に登校させず、児童生徒の意思を尊重するようになったことも増加の一因ではないか」とみている。今号では、発達障害のある子どもと不登校について考えてみる。

1 ASDの子どもが不登校になるとき（環境の変化に弱い）

- ・対人関係やコミュニケーションが得意ではないため、学級で浮いた存在になりやすく、それが不登校につながることもある。

【学校で直面する困難】

- ・人とコミュニケーションをとることが苦手である（友達よりも大人に話し掛ける）。
- ・得意な教科と苦手な教科が極端に分かれる傾向にある。
- ・マイルールや自分のやり方にこだわるため、集団行動が難しく孤立する。
- ・急な予定変更に対応できずにパニックを起こしやすい。
- ・一度関係が崩れるとリカバリーが難しい。
- ・教室の音や声を聞くと、心がざわざわして落ち着かない。



2 ADHDの子どもが不登校になるとき（行動抑制が難しい）

- ・不注意や衝動性の特性のため、失敗や友達とのトラブルを起こしやすく、それが不登校のきっかけになる場合がある。

【学校で直面する困難】

- ・授業中、注意の集中・持続が続かない。
- ・思ったことをすぐ口にして周囲の人とトラブルになる。
- ・忘れ物やなくし物が多く、整理整頓が苦手である。
- ・人の話に割り込んで自分の話をしがちになる。
- ・時間にルーズなところがある。



3 発達障害の子どもが「学校に行きたくない」と言い始めたら

①行きたくない理由をあれこれ追及しない

できるだけそっと見守り、子どもが安心して話したくなるような雰囲気をつくる。

②登校するかどうかは子ども自身に決めさせる

親が主導すると子どもはプレッシャーを感じて行きづらくなる。自分で選べる状況にあるのは、子どもにとって大きな安心材料になる。期待をかけ過ぎず、寄り添う。

③学校に行く、行かないの二択にしない

一日も早く再登校してほしいと目標を考えると、子どもは苦しい状況に追い込まれてしまう。「学校に行く」ことに一点集中するのではなく、それならできるかもという様々な選択肢を提示する。登校刺激を与えるが、毎日行かなくてもいい、得意な授業だけ受けてもいい、辛くなったときはヘルプサインを出して保健室に行ってもいい、別室登校や適応指導教室を活用してもいいなど、段階的に復帰する方法があることを伝え、登校に対するハードルを下げる。

**とれたて直送便**

「物には限度、風呂には温度が大切！」

風呂は湯加減が大切なように、物には限度がある。ネジを強く締め過ぎるとネジ山をつぶしてしまう。「ほどほど」で「適度」な「ちょうどいい」力加減は、子どもにとっては難しい。「言わなくても分かるだろう」と思うことほど、見えるように分かるように伝える。